

テーマ「三遠南信地域の魅力を磨く～交流人口拡大への取組み～」

(敬称略)

コーディネーター	特定非営利活動法人 しんきん南信州地域研究所	所長	林 郁夫
報告者	浜松市	文化振興担当部長	寺田 聖子
行政	豊橋市	市長	佐原 光一
行政	駒ヶ根市	市長	杉本 幸治
行政	松川町	町長	深津 徹
行政	高森町	町長	熊谷 元尋
行政	阿智村	村長	熊谷 秀樹
行政	下條村	村長	金田 憲治
行政	天龍村	村長	永嶺 誠一
経済	蒲郡商工会議所	会頭	小池 高弘
経済	喬木村商工会	会長	藤本 芳男
住民	天龍村柚餅子生産者組合	組合長	関 京子
住民	合唱劇「カネト」をうたう合唱団	普及委員長	清水 良文

■はじめに

コーディネーター／特定非営利活動法人しんきん南信州地域研究所
林所長



豊橋市の佐原市長をはじめ参加者の皆様にはどうぞよろしくお願いたします。

まず、私の挨拶と自己紹介を兼ねて少しお

話をさせていただきたいと思います。

私どもしんきん南信州地域研究所は、飯田市と飯田信用金庫が地域活性化パートナーシップ協定を締結して、平成21年に設立された組織です。

昨年は飯田信用金庫との共同により、三遠南信地域内の信用金庫の連携事業ということで、三遠南信しんきんサミットにおいて三遠南信地域に関する意識調査を実施しております。

三遠南信しんきんサミットは、三遠南信地域に本店を置く八つの信用金庫それぞれが地域金融機関としての存在と役割を地域にアピールするというを主眼としておりますが、もともとは平成19年の三遠南信サミットにおいて採択された三遠南信地域連携ビジョンに

ある「持続発展的な産業集積の形成」という項目の一つに挙げられている「地域金融機関による三遠南信ビジネスマッチングの促進」を具現化するものと認識していただければと思います。

このしんきんサミットでは地域経済活性化に関する講演会、あるいはシンポジウム、物産展を開催しておりますが、昨年新たな連携事業ということで三遠南信地域に関する意識調査というのを実施したというところが経緯でございます。

今回のアンケート調査の結果、二つのことが言えるものと考えております。一つは、三遠南信地域内での他地域からの、それぞれの地域の地域資源への認知度、あるいは三遠南信自動車道に対する認識や意識といった面でまだまだ地域間に温度差があるのではないかと、もう一つが、三遠南信自動車道に関する情報だけではなくて、それぞれの地域資源情報あるいは具体的な取り組みの内容についての情報発信や情報提供、そして、人的なものも含めて交流の機会の場の積極的な創造といったものが求められているという結果となっております。

したがって、ここに御列席の皆様によりまして積極的な情報発信をしていただきながら、当サミット、そしてこの分科会が情報発信あるいは交流機会の創造機能を発揮できるような場となりますように、よろしく願いしたいと思います。

それでは、まず前年度サミットでの本分科会の取りまとめ結果、それから、今回のテーマについて、事務局に説明を求めます。

事務局

それでは、前年度の議論の取りまとめ結果につきまして、簡単に御説明申し上げます

昨年度の「風土」分科会では、本地域の多様な地域資源を生かした地域経済活性化と雇用創出を中心に活発な御議論をいただき、次

の3点が結論とされております。

1点目、平成29年のNHK大河ドラマが地域を舞台とする「おんな城主直虎」に決定するなど三遠南信地域の活性化に関し、歴史・文化を大切に、民俗文化遺産を守っていく取り組みが必要であること。

2点目、地域が有する多様な地域資源を生かすためには、情報発信力を高めていくとともに、SENAの枠組みを中心に一層連携を強化していくことが必要であること。

3点目、三遠南信地域の歴史や風土、文化などをまとめ、遡及力あるストーリーとしてアピールするため、日本遺産の認定を目指すことが有効である、といった3点でございます。

次に、本日のテーマについてですが、民俗芸能、自然、物づくり文化など、三遠南信地域に広がる多彩な資源を磨き上げることによる誘客の促進などの交流人口拡大に向けた取り組みを探るため、三遠南信地域の魅力を磨く交流人口拡大への取り組みをテーマといたしました。

なお、出席者の皆様には、全体会で報告いたしました現行ビジョンの評価が机上でございますので、議論の中での参考にさせていただけたらと存じます。

コーディネーター

それでは、日本遺産申請に向けた取り組みにつきまして、浜松市市民部文化振興担当部長、寺田聖子様から御報告いただきます。

■報告

浜松市市民部 寺田文化振興担当部長

日本遺産申請に向けた取り組みについて、取りまとめをさせていただいております浜松市から御報告をさせていただきます。

三遠南信地域につきましては、皆様御承知のとおり、民俗文化財の宝庫と評されているところでございます。こちらの写真は、南信

州の祭りに登場します重要人物でございます。近年ではこうした神々の世界が宮崎駿監督のアニメにも紹介され、世界中から注目を集めるようになっております。これは新野の雪祭りの神様です。

そして、皆様と昨年の三遠南信サミットでこうした無形民俗文化財を中心としまして文化庁の日本遺産としての認定を目指すという方針をまとめ上げたところでございます。これを受けまして、平成28年度当初に35市町村の皆様へ日本遺産への参加意向、また構成要素となり得る文化財の推薦をお願いしたところ、御回答いただいた市町村からの構成要素の候補が300件を超える数となりました。文化庁との調整では、連携の意義、この地域の文化財の特色の明確化、構成要素の更なる絞り込みをはじめとして、日本遺産としてのストーリーを確立するように求められております。

日本遺産について、もう一度振り返りますと、単体の文化財ではなく地域の中で共通するテーマの文化財をつないでストーリーをつくり、新たな見どころを模索、提案していくのが、国の考え方でございます。これは文化財の保護だけではなく、地域振興の活用にも着目しようという制度でありまして、文化庁とその他の官公庁が中心になって進めている事業です。

平成27年度の申請が登録されたエリアは、18か所になります。平成28年度の申請により登録されたエリアは19か所となっております。静岡県、愛知県は認定が0件、長野県は木曾地域の1件となっております。

今のところこういう状況ですが、文化庁は2020年までに全国100か所程度を万遍なく認定すると言っております。後の申請になるほど狭き門になると予想をしているところです。

三遠南信地域ですが、SENAの連携によりまして無形民俗文化財の継承、活用について早くから協議が重ねられてきました。それぞれの集落に伝えられてきた文化財は、少子化や

過疎化など集落の抱える問題とともに次世代の継承が大変課題となっております。実はこれは中山間地域だけの問題ではありません。都市部におきましても、町内人口の流出、また新たに住んでいただいた方が実は地域の活動への参加率が大変低いという状況もあり、中山間地域同様の問題が都市部にも生じていると私たちは認識しています。

こういった問題に対して、浜松市がどう取り組んでいるか、参考に6件ほど御案内をさせていただきます。

浜松市内では無形民俗文化財保護団体連絡会が発足しております。それぞれの代表が定期的に情報交換を行い、お互いの課題等を共有し合っています。「谷が違^{ちが}う」という表現が使われるのですが、それまで山を越えた向こうには別の暮らしがあるという認識だった世界が、交流を深めることでお互いを理解し、共通の課題を協力して解決しようとする働きかけが進んでいると考えています。この写真は大河ドラマの舞台でもあります「川名ひよんどり」の会場を連絡会の皆様が見察をされているところでございます。

無形民俗文化財をどのように継承していくかというところで、小中学校の行事の中でそれを形にしていこうという試みでございます。市内天竜区と北区の2校で学校、地域、行政、教育委員会が連携したモデル事業を実施しております。

浜松市は昨年度2月議会におきまして議員提案となります新しい条例、民俗芸能条例を制定いたしました。これは市内に豊富に継承された無形民俗文化財を守り振興するために、市民、関係団体、行政の役割を示しているものであります。当時の議長からは、議会終了後、こちらの新聞にも記載がありますが、この条例が日本遺産認定の後押しになるというコメントもいただいております。

これは「ザ・山フェス」というイベントでございます。浜松駅前で開催しております。

市内の中山間の産物や文化を紹介し、都心部の交流を図る事業であります。赤い部分が舞台でございますが、舞台には佐久間町の浦川歌舞伎に参加した地元の小学生がそろい踏みをしております。舞台の上と舞台の下部分になります。白波5人男の一場面です。大変好評をいただきまして、御来場の皆様からは、市内に継承された郷土芸能を改めて認識されたとの声もありました。

こちらは静岡文化芸術大学を会場とした日本中世文学会の浜松大会の模様です。こちらにおきまして、浜松市にある懐山という地域があるのですが、その「おくない」の皆様が一場面を演じているところです。この「おくない」で唱えられているセリフが、実は古今集などから古い歌を引くなどして文学的にも注目されているというところで、この学会での注目を受けたものでございます。

私どもは、平成28年度から新たな認定文化財制度を導入いたしました。浜松市認定文化財というものです。皆様のお宝、地域のお宝、これを浜松市が認定するものです。お金は何も出しません。要は何も出さないのですが認定をいたしますので、どうぞ、地域の個性を生かした地域おこしの活動にこれを生かしてくださいという取り組みを進めております。今年度は約100件の申請がありまして、3月末には第1期の認定を公表できると思っております。

以上6件の事業を紹介させていただきました。このように継承、そして未来へつなげる取り組みにとって、2020年の東京オリンピック、パラリンピックは世界に発信できる大変大きなチャンスととらえております。この日本遺産に向けての申請はオリンピック、パラリンピックの文化プログラムのテーマとしても、また本日の「風土」分科会のテーマにも合致するものと考えております。既にそれぞれの市町村で取り組まれている事業も数多くあるかと思いますが、広域連携の取り組みに

より、回遊性を持たせて相互にメリットがある活動になればと思っております。今後は文化庁の事前指導にありますように、来訪者の興味にこたえられるストーリーをブラッシュアップしていきたいと考えています。

まだ素案ではありますが、三遠南信地域の無形民俗文化財の多くが古い時代の特色を残しているだけでなく、広域での連携ができれば、山から海の民俗までバリエーションに富んだ祭礼を御案内することが可能となってまいります。祭礼の多くは1年に数日のみの開催ですが、これだけ多くの地域が連携すれば、365日いずれかの祭礼を御案内することができます。ごく一部の祭礼と季節の名産を御紹介しているものを見ていただきますと、1年中魅力のある、途切れない地域であることを御紹介できると思っております。

また、多くの観光客をお招きしたいお祭りや外部からあまり来訪者をお招きできないお祭りがあるかと存じますが、谷を越えた場所に同様のお祭りがあれば、相互に補完し合うこともできると考えています。現時点では日本遺産に見合う構成要素の精査、ストーリーの構成を進め、皆様の御協力をいただき、平成29年度の申請を目指してまいりたいと思っておりますので、どうぞ引き続きの御協力をお願い申し上げまして、私の御報告とさせていただきます。

コーディネーター

ただいまの報告に関しまして、何か御質問、御意見等はございますか。

豊橋市 佐原市長

ちょうど出ているところに1年のお祭りのマップというものがあるのですが、三遠南信地域の花火系のお祭りが、あえて入っていないところについて、この日本遺産の取り組みという中では何らかの要件に当たらないものかどうか、教えていただけたらと思います。

コーディネーター

その点いかがですか。

浜松市市民部 寺田文化振興担当部長

国指定、県指定といったものを一つの基準とすることを考えています。また、どのように絞り込むかという点について皆様と御相談を申し上げていきたいと思っております。

今、300件というのは、実は国・県レベルの指定で300件というところです。

皆様とこれからこういった要素とするか決めていきたいと思えます。花火も様々ありますので、要素として生かしていくか御検討いただきたいと思っております。

コーディネーター

その他、ほかに何か御質問、御意見等はございますか。

豊橋市 佐原市長

いつもここが問題になるのですが、後継者不足であと5年、10年すればなくなってしまう祭りがあるということがずっと懸念事項であるわけです。

今後、どのように継承していくのかという視点が、例えば都市と山村の交流によって一緒に習うとか、例えば花祭りは前習いがあったりして、東栄町でも都市部の人たちに前習いをし、本番にも参加している例があるわけです。

今後、地域が受け入れるかどうかという問題はあるわけですが、この中に組み入れていかないと、実態のあるものとして厚みを持たせていくということが必要ではないかと思いましたが、指摘させていただきました。

浜松市市民部 寺田文化振興担当部長

まさに連携の意味合いがそこにあるかと思っております。谷を越えてというか、そちらでの取り組みがこちらにも谷を越えて伝わ

り、いいところを取り入れながら、また連携できるところを探る、そういった点で皆様とまたお話し合いをしたいと思っております。

喬木村商工会 藤本会長

これは日本遺産へ向けてのピックアップについて、全国で100か所ということは、観光資源として掘り起こしということですね。

商工業者から見ると、また視点が違うと思うのです。例えば、飯田地方に「オコギ」があります。「ウコギ」とも言い、タラの芽やコシアブラと同じウコギ科です。

これは例えば伊那市へ行くとそんなにないですね。飯田下伊那地域の人たちはまともに食べているので、飯田下伊那地域の人だけは全国どこにでもあると思うのですが、長野県では飯田下伊那地域だけです。また、びっくりするのは、山形県へ行くと垣根に使ってあって、ウゴキ茶があります。これは鯉もそうなのですが、山形県へ行くと、鯉も飯田下伊那地域と同じで、上伊那地域へ行くと鯉こくなのですが、飯田下伊那地域では鯉のうま煮なのです。このように食の文化もちょっと違った視点で見られるのではないのでしょうか。

ですから、できれば産業界へも意見を聞いていただきたいと思えます。

花火の話が出ました。7月ぐらいから飯田下伊那地域へ来ると毎週必ずどこかで花火が上がっているのです。清内路の花火や8月15日の諏訪湖の花火も有名ですが、小さな市町村、集落で、市町村だけでなく集落で花火を上げています。そういう花火の文化というのは、この飯田下伊那地域へ来ると必ず毎週どこかで見られます。それも、すぐ真下で見られます。

またアンケートについて、何らかの格好で食の文化なり、行事の文化について、我々の団体にも聞いていただければと思えます。

このあたりは獅子舞も毎週必ずどこかで、

数十か所で獅子舞をしています。中で太鼓をたたいて、笛を吹いて、飯田の大きなお獅子も有名ですけれど、小さな50戸足らずの集落でも立派な屋台獅子をやっています。それから、山車というか、屋台といったものがありますので、ぜひまた再調査をお願いしたいと思います。

浜松市市民部 寺田文化振興担当部長

ありがとうございます。皆様の御意見がこの場で出てくることが大変うれしいと思っております。



■意見交換

コーディネーター

続きまして、本日のテーマに沿って事前のアンケートを取らせていただいておりますが、三つの論点に基づく意見交換をそれぞれの発言者の皆様からいただきたいと思っております。

それでは、三つの論点のうち一つ目の論点である「交流人口拡大に向けた取り組みについて」、御発言をお願いしたいと思います。発言いただく方につきましては御指名をさせていただきますので、その順序でお願いいたします。

まず、高森の熊谷町長に「おんな城主直虎」による広域連携について、お願いいたします。

高森町 熊谷町長

昨年、NHK 大河ドラマ真田丸で長野県の上田市が大いに盛り上がりました。本年は「おんな城主直虎」の番です。高森町には直虎のいいなづけである亀之丞のお父さんが殺害されて、亀之丞の身も危険だということで、10年間、高森町内にある松源寺に逃げていました。

今、町内ではのぼり旗を道路沿いに立て、町内の事業所の皆さんにもこういった小さいのぼり旗を持っていただいて、町を挙げて盛り上げているところです。

高森町を大河ドラマの中で直接取り上げていただくことができれば一番よかったのですが、残念ながら10年過ぎて、もう浜松へ帰ってきた場面しか出ませんでした。しかしながら、先日、ゆかりの地の紹介で何十秒間か放映があり、現在、町にも問い合わせが来ております。昨年12月から観光客もやってきていまして、多い日では1日7台の観光バスが松源寺に来ております。これから5月頃にかけて約300台のバスがやってくると聞いております。

今回の大河ドラマに取り上げられるということで、高森町もゆかりの地として大いに盛り上げていきたいと思っております。また、大勢の皆さんに訪れていただいて交流することができればと期待をしておりますし、何より本拠地である浜松市さんとも連携をとりながら取り組んでいくことができると思っています。

また、高森町は明治大学野球部元監督である島岡吉郎さんの出身地です。毎年8月には明治大学の野球部が夏合宿に来ています。町民との交流、また子供たちへの野球教室をしていただいています。プロ野球選手となる方もいらっしゃいますので、そういった人たちと身近に交流ができるということで、子供はもちろん、大人の人たちもとても楽しみにしています。

この明治大学野球部との交流が縁で、来年8月には東京六大学野球連盟の現役選手によるオールスター戦が飯田市で開催できる運びとなっております。これからも御縁を大切にしていきたいと思っています。

また、高森町は市田柿の発祥の里です。高森町の市田柿と川崎市麻生区に禅寺丸柿という柿がありまして、高森町のゆるキャラが「柿丸君」、麻生区のゆるキャラがひらがなで「かきまる君」です。ゆるキャラと柿が縁で交流が始まりました。

お互いのイベントにも参加していますが、麻生区には昭和音楽大学と日本映画大学という二つの大学があります。この二つの大学も、明治大学野球部と同じように合宿に来てくれるようになりました。合宿の合間を縫って町民との交流、コンサートを開催していただいたり、映画大学では町の中を撮影していただいたりして交流が始まっております。まだ始まったばかりですので、これを長く続けていくことができればいいと思っています。

私たちは普段から高森に住んでいて景色も当たり前のように見えますが、撮影してくださる映画大学の皆さんのような都会の人たちから見ると、それは決して当たり前の風景ではないようです。東京では味わえない、川崎では見ることができない風景など自分たちの地域に埋もれているあまり気づかない資源にしっかりと磨きをかけていくことが大事ではないかと思っています。

また、友好都市である静岡県御前崎市、熊本県高森町、和歌山県高野町、そして徳島県美馬市とは、行政だけの交流だけではなく、農産物の交流や住民同士の交流も続いております。

一番嬉しかったなと思うのが、去年の熊本地震の折に静岡県御前崎市の市長から、「高森町と熊本県の高森町が同じ名前ということで何か関係があるのか。」と電話をいただいて、「実は交流しています。」とお話したところ、

御前崎市に備蓄をしてあったお米や毛布などを直接熊本県高森町に送っていただきました。普段から人とのつながり、人との交流を大事にしていきたいと考えております。

コーディネーター

続きまして松川町の深津町長にお願いします。

松川町 深津町長

民俗芸能の宝庫だということについて、先ほど藤本会長からもちょうと話がありましたが、交流人口を増やしていくために民俗芸能を生かしていくということ、様々なお祭りのお話が出ましたが、どうしても民俗芸能というのは1年中やっているわけではなく、単発的にやられている。そうすると、文化を守っていくという考え方と、それを使って交流人口を増やしていくとなりますと、論点がちょっと違ってくると思います。

本日のテーマは、交流人口を増やして、それぞれの地域の活力を見出していこうということで考えていきますと、その一つの民俗芸能に加えて自然、物づくり、あるいは食というものを合わせて、総合的に、戦略的にストーリーをつくるなかでアピールしていかないと「1年のうち、何月何日に非常にいい獅子舞をやっております。」だけで終わってしまいます。交流人口を増やすという点から考えていくなれば、文化芸能を伝承することは大事なことです。それを使って交流人口を増やしていくためには、総合的な戦略でもっていかないと非常に難しいのではないかとありますが、感想でございます。

私どもの町でございますが、少しでも多くの人に訪れていただいて、地域のファンを少しでもつくって、人・もの・情報が動くことで経済が動いていくと考えてやっております。松川町は果物の町でございます。春先のサ

クランボから始まりまして、キウイ、ブルーベリー、桃、ナシ、リンゴ、12月いっぱいまで、とにかく果物のおいしいところで、日夜の寒暖の差もあり、果物について大きくアピールをしているところがございます。

多くの皆さんが年間を通じまして果物狩りに訪れていただき、直営の温泉、それから山林を生かしたフォレストアドベンチャーという施設もございます。そうしたことを総合的に、中心になるのはやはり果物だと考えております。

しかしながら、高齢化あるいは後継者不足等問題を抱えておりますが、果物の里としての情報発信を続けていきたいと思っております。

私どもも姉妹都市があつて、多くのおいしい果物をアピールしてまいりました。ただ、先ほどの話ではないが、そうしたアピールがどう成果を上げて、どういうふうに動いて、どういう町を目指して戦略的に動いているかという点については、残念ながら欠けている部分もあると考えていることから、現在、DMO（観光局）の立ち上げの準備室を設け、民間の感覚も取り入れる中で検討しています。

なぜ、そうしたことをやったかという点、行政が全て観光の分野に携わっていると、行政が、どんどん大きくなっていってしまいます。そして、民間の感覚を入れる中でスピード感も持たせていくとなると、そういった組織を立ち上げて総合的に考えていくことが大切ではないかと思っております。

コーディネーター

続きまして、阿智村の熊谷村長、お願いいたします。

阿智村 熊谷村長

自分たちの取り組んでいることと、そして、サミットをずっとやっていまして提言も含めてちょっとお話をさせていただきたいと思

います。

阿智村には、御存じのように昼神温泉郷があり、観光立村ということで、観光を中心になってやっている村でございます。

分科会のテーマが交流人口の増加ですので、今も松川町長から話がありましたように、村がDMO（第三セクター）に出資し、民間感覚も取り入れて観光局をつくりましてやっております。

昼神温泉が、年間70万人の方が来るものですから、昼神温泉だけではなかなか厳しい部分があり、滞在型観光をしてもらうため、満蒙開拓平和記念館や、星空が日本一きれいだと環境省から認定が取れたものですから、それも含めましていろいろな分野で滞在型観光の促進を図り、年間130万人の方に来ていただいています。

交流人口を増やすということは、旅に来た方が「阿智村はいいところだね」、そして「三遠南信地域はいいところだね」と思っただいて、いつかは定年後にこの地域に住みたいと思わせることだと思っています。交流人口を増やすことは定住につながっていくと考え、地道に取り組んでいるのが現在我々のやっていることだと思っております。

そして、これからは三遠南信地域全体の滞在型観光をしてもらいたいと思います。例えば昼神温泉に泊まった方がいろいろなところへ行って見てもらいたいのです。この地域を訪れた方は、日帰りや1泊2日という日程なのですが、例えば我々が北海道や沖縄へ行ったときには、「もう2泊しないとったいなね」と思います。何とかこの三遠南信地域を2泊3日できる地域にしていくことが我々の役目ではないかと思っております。例えば松川町でリンゴを食べて、そして蒲郡市でミカンを食べられるとなれば、この三遠南信自動車道が開通すれば1時間ぐらいで結べますので、そういったことをもっと戦略的にやっていくことが非常に大事ではないかと思っております。

我々、南信州地域の人は本当に海に憧れています。東三河地域や遠州地域に行って海を見るのが楽しみです。そして、逆に東三河地域や、遠州地域の皆様は山を見るのがすごく楽しみだと思っておりますので、やはり交流を通じて2泊3日滞在して、これは観光だけではないと思っておりますので、先ほども寺田部長のお話があったように、祭りのことなど様々な切り口はあると思っておりますので、ぜひそういったことができるかと思っております。

ただ、これは言っているばかりでは進まないと思っておりますので、先ほども全体会で牧野飯田市長が言われましたように、簡単にはできないと思っておりますが、三遠南信地域での広域連合という話も前々からありますし、まずは戦略的なプロモーションができる人をぜひ、これは民間人でいいと思っておりますので、SENAの中に1人でも2人でも入れていただいて、予算をつけて、そういった方がプロモーションをつくって、いろいろな切り口を、さっきの花火の切り口や食べ物の切り口でもいいので、例えば観光戦略で行くなど、この10年が勝負だと思っておりますので、実際に動いていく、ぜひそんなことをお願いして終わりたいと思っております。

コーディネーター

それでは、続きまして下條村、金田村長、よろしくお願いたします。

下條村 金田村長

下條村は、交流人口の拡大に向けた取り組みを行わなければ、だんだんと人口が減少していきます。人口拡大に向けて、風土というキーワードが非常に大事であるということで参加をさせていただきました。

村の状況を若干述べさせていただきたいのですが、今ここに南信州地域の町村長がいるのですが、下條村の面積は約38平方キロメ

ートルであり、一番小さい村です。かつては農業中心の村であったのですが、現在は飯田市のベッドタウン的なところがあって、第三次産業に従事する者が非常に多くなっています。

日本全国もそうなのですが、長野県も人口がだんだん減ってきている時期に、下條村は子育て支援に関する政策を前村長が早くから実施いたしまして、人口が増え、若年層の者も非常に増えていくという状況だったのですが、ここ2、3年は、人口減少の傾向が大きくなりました。現在は、何とかして人口を増やしていくための取り組みをやっていきます。

そのためには、交流人口をとにかく多くしなければいけない中で、一つは下條村から転出した人たち、または近隣地域から転出した人たちに働きかけていき、その孫世代をこちらに呼び込む取り組みをしていきたいということで、昨年11月頃から東京で、国、県、それから南信州広域連合で企画しているいろいろなイベントに参加させていただいているところです。

下條村では、市田柿、そばに非常に合う親田辛味という大根、リンゴ、ナシ、そば栽培が農業の中心になっております。

そばに関しましては、遊休荒廃地を解消するために、村で種子から刈り取り、買い取りまで補助を出して、約50ヘクタールのそばを作付けし、そばの城という観光資源がありますので、それを中心にして知名度を上げていきたいということが1点です。

もう一つは歌舞伎です。この間、11月に豊橋市におきまして公演をさせていただいたのですが、大鹿歌舞伎とともに下條歌舞伎も頑張っております。伝統芸能として継続していきたいと思っておりますが、いずれの地域も後継者不足で非常に悩んでおりますので、後継者育成を今後行政として支援をしてまいりたいと思っております。

そのほか、これからいろいろなものを開発

し、発見していかなければいけないかと思っています。

私どもの村内の標高777メートルのところにはちょうど神社があります。それから、極楽峠のように知名度のあるものを活用し、滞在型観光を目指した取り組みをこれからしていきたいと思っています。

コーディネーター

それぞれの皆様からそれぞれの地域の取り組みを御紹介いただきました。そういう中で交流人口を増やしていくという点ではストーリーをつくっていく必要があります、総合的な地域戦略が必要であるということです。また、行政だけではなくて民間の活力を大いに活用していく中で、観光という面では連泊を促進するためには広域的な地域連携が必要ですし、それを管理し、推進していくためにもプロモーションができる人材の育成、あるいは後継者を含めて維持、活用していけるような「人」を育てていくことも必要であるということ、地域の資源を改めて再発見していくことが必要であるという御指摘をいただいたかと思えます。

次に論点の二つ目ですが、地域連携による資源の活用というタイトルになっております。地域に存在する資源を活用するという上で、特に他地域と連携した取り組み、あるいは今後連携をしていく取り組むべきものにつきまして、御発言をお願いしたいと思います。

まず、駒ヶ根市の杉本市長、お願いいたします。

駒ヶ根市 杉本市長

駒ヶ根市も具体的に総合計画をつくる中で、今、駒ヶ根市に交流人口、観光客130万人、経済効果が大体50億円ぐらいですので、1人4,000円ぐらいなのです。それを三遠南信自動車道とリニア中央新幹線の開通を見越して200万人の観光客、1人1万円の経済効果、200

億円と具体的な目標を定めております。

そういった中で地域の資源として、現在、観光客が大勢訪れていただいているのが中央アルプスです。この地域の資源をまず、さらにグレードアップしようと地域連携をしまして、上伊那8市町村で中央アルプスのジオパーク化を進めようと昨年12月に推進協議会を立ち上げさせていただきました。それから、あそこは県立公園なのですけれども、今、みんな連携をして国定公園化を目指しております。この目指す理由はインバウンドをターゲットにします。

私も先月、台中市に経済界の皆さんとともに台中空港から松本空港へのチャーター便のインバウンドに関するプロモーションに行ってきた。やはりインターナショナルがつくとつかないでは相手の反応が全く違うのです。世界のジオパーク、インターナショナル、国立ということを目指して勉強して進めております。

それから、富岡の製糸工場、こちらは世界遺産になりました。長野県もかつて大正時代から絹を中心にした産業が非常に盛んでしたので、その絹の道プロジェクトというのを立ち上げようということで、私も発起人となり、絹の道広域連携プロジェクトを立ち上げさせていただいて、県下のいろいろな市町村と連携をして、交流人口増に生かしていきたいと、ストーリーをつくっています。これは民間の方もみんな大勢入っていただいています。さっきのジオパークについても民間の人が大勢入っていただいています。

それから、信州シルクロード連絡協議会を立ち上げ、交流人口を呼ぶための観光ルートを新たに模索しております。

さらにもう一つ、地域外に発信することが非常に大事だと思っていますので、シティープロモーションの協議会が立ち上がっていますので、そこにも今、上伊那郡の市町村に入らせていただいて、いかに全国にどうい

とを発信していくか。また、その中で人材育成もしていったらいいかと、今、そんな取り組みもさせていただいて、連携を図っております。

もう一つ、何とんでもなく JR 飯田線の活性化をすることが課題でもありますので、これは全ての市町村で同盟化をさせていただいて、ようやくここ2回ばかりは JR 東海の人と直接会って話ができるようになってきましたので、この辺は三遠南信との連携と仕上がっております。

それから、もう一つ、三遠南信地域の皆さんと、ぜひこれからはシティープロモーションという点は連携して行って、いかに情報発信することが物すごく重要だと思います。先ほど、豊橋市長とも話したのですが、私も今度、三遠南信地域で期待していることはリンゴとミカンの交流ができる、山と海の交流ができるというストーリーをつくれれば、非常にない者同士を補完し合うという意味では、まだまだそれぞれの地域の特産品や魅力をわかっていない状況です。だから、やはり今、この三遠南信というのは全ていい素材になるのですから、その素材を生かすように今から情報を共有するなど積極的に取り組んでいけば、もっと、もっと連携の力が強くなると思っています。

コーディネーター

ありがとうございました。

続きまして、天龍村の永嶺誠一村長、よろしく願いいたします。

天龍村 永嶺村長

先ほどトークセッションでも発言させていただいたところですが、私どものところは愛知県と長野県の県境にちょうど位置しております。をこの協議会は、昭和52年に

発足しまして40年が経過しようとしています。この協議会の活動の一つとして産業振興部会がございまして、いろいろな5町村の観光PR等を中心に行っています。その一つに愛知県豊根村にある茶臼山を中心としたスタンプラリーを行っています。茶臼山には年間で約45万人のお客様が来るといふことで、茶臼山を訪れたお客様を近隣の町村に回遊していただくスタンプラリーを行っています。三遠南信自動車道などができたおかげで交流人口が約72万人まで増えてきたという統計もあるところです。天龍村では、愛知、長野両県境の5町村が一つになって観光PR等にも努めてまいりたいと思っています。

本日は、先ほどの報告の中にもありましたが、民俗芸能についてもちょっと触れたいと思うのです。

私どもの村には国の重要無形民俗文化財の天龍村の霜月神楽があります。これはかなり古くから伝えられたものですが、そのお祭りをきちんと伝承しようということで、「天龍村霜月神楽等資産化実行委員会」を設立しまして、資料集のほかにDVDを4本つくりました。

なぜつくったかといいますと、1番は後継者不足なのです。この大事なお祭りを後世に何とか受け継いでいかなければならないということですが、このお祭りは踊りの所作などを記録したものが全くなかったのです。いわゆる口頭伝承でして、先人の皆様が後継者に身振り、手振りでお伝えしていくお祭りなのです。しかしながら、後継者がいないために絶やしてはいけないということで、細かい部分も今回は文章化し、あるいは映像化して残していこうということで作りました。これは天龍村の霜月神楽だけではなくて先ほど出ましたが新野の雪祭りや、あるいは和合の念仏踊りといった国の重要民俗文化財に指定されたお祭り全てにおいて、後継者不足、あるいは資金難が1番の課題になっていると思うのです。

そこで、平成27年度から長野県では南信州広域連合と下伊那地方事務所によりまして南信州民俗芸能継承推進協議会が設立されました。こういった伝統芸能を守っていきましようということで、今いろいろなつながりを通じまして、連携した活動を行っているところがあります。天龍村もその一員として一緒になって協力をして、伝統芸能を継承していくことを現在取り組んでいます。

それから、私どもの村では地域おこし協力隊の隊員が7名活躍をしてくれています。地域おこし協力隊のOBの1人が、この祭りの担い手として活躍をしていただいております。そういった外部からの人材を生かすということも一つの手ではないかと思えます。その彼は担い手としてだけではなく、民俗芸能に興味を抱く若者を村外から連れてきて、天龍村のファン層の拡大にもつなげていただく活動も行っています。これも交流人口の増加につながっている事例の一つだと思っております。

それから、日本遺産に関する部分ですが、我々のお祭りをよく見てみると、近隣市町村のお祭りとは非常に似ている部分があるのです。お祭りの背景や歴史などをたどりますと、そのルーツがそれぞれつながっているのではないかと思っております。したがって、近隣市町村と一緒に、歴史や背景をPRすることによって広域的な地域の活性化につながるのではないかと思っております。

いずれにしても、伝統あるお祭りを存続し後世へきちんと継承していくためには、より一層いろいろな面での連携が必要になるかと思えます。

コーディネーター

続きまして、喬木村商工会藤本会長、よろしく願いいたします。

喬木村商工会 藤本会長

お祭り、伝統芸能、伝統文化を継承してい

くには非常に困難だという話がありました。

例えば、青森にねぶたがあります。私は東北が大好きで、ねぶたも10回ぐらい行っております。

ねぶたがなぜあそこまで有名かというところ、ねぶたというお祭りを産業化しているのです。ねぶたにやってくる観光客などは何十万人という人ですが、それだけの宿泊客を受け入れるキャパシティがないので、青森市周辺の半径50キロから70キロぐらい、時間にして1時間から1時間半ぐらいの地域にある宿泊先を拠点にしています。そして、夕方に会場周辺へやってきて、お祭りは栈敷席で観覧するのです。諏訪湖の花火大会と同じようにも栈敷席、1席幾らで売るので。

もう1点として、ねぶたは参加することによって参加費を取ります。1週間何百万人と観光客がやってくるのですが、午後9時になると一斉に宿泊先へバスに乗って帰り、ごみも何も残りません。次の日、また大騒ぎのねぶたが始まります。青森港の埠頭がありまして、そこにバスが何十台、何百台と止められるようになりまして、祭りを産業化しています。

お祭りは伝統でやっていくには必ず衰退してしまいます。集落の人口減少に伴う後継者不足に悩んでいるところもあります。お祭りをどうやって産業として生かしていったらいいのかということを考えると、どこかにヒントがあるのではないかと思っております。私はいつも見てきております。東北はお祭りが多いですが、そうやってねぶた舞台をつくる大工さんがいたり、いろいろなものを売っているアルバイトの高校生がいたりしております。伝統芸能も産業になるということをお話させていただきました。

さて、喬木村は三遠南信自動車道の竜東側の出口になっております。それから、対岸の飯田市ではありますが、喬木村から5分とかからない位置にリニア中央新幹線長野県駅ができるという非常に恵まれた地域ではないかな

とっております。

しかしながら、長野県も海の魚がないのです。三遠南信自動車道が開通し、喬木村から1時間で三河湾へ行けるということは、リニア中央新幹線ができれば、東京のお客さんがこの地方へ泊まりながら海釣りに行ける。1時間もすれば帰ってきて、こちらで料理して食べられる。そういった意味では、三遠南信自動車道は非常に革命的な道路ですし、大いにお互いに連携をし合えば有効にやっているとと思います。

喬木にはイチゴがあります。先日、旅行先でイチゴを売っておりましたので、約500円のパックを二つ買ってきました。喬木村だと650円や680円ほどの値段です。孫が喜んで食べておりましたので、それをちょっと味見してみましたら、一口目はちょっと甘かったのですが、二口目には味がありません。どこで食べても、どこのイチゴを食べても、喬木のイチゴに勝るイチゴはないです。自画自賛をしておりますけれど、一度食べてみていただきたいです。

このイチゴ狩りには、バスだけでも年間数百台がやって来ます。予約でいっぱいのため、「よそをご紹介しましょうか」と言うと、「喬木のイチゴを食べたくて電話しているのです」と粘られることがあります。そんな感じで、喬木はイチゴ狩りと、この飯田下伊那地方が南限となるリンゴ狩りをやっています。

青森には「つがる」という品種のリンゴがあります。また、フジも青森が発祥の地です。飲み屋で、長野県からやってきたというと怒られます。青森で開発したリンゴを長野県がバンバン作って売ってしまうので、青森のリンゴが売れないと怒られてしまうのです。では、青森はどうしているかという、雪室へ入れて、あるいは冷蔵庫へ入れて、時期を変えてから売っています。そのぐらいこの地方のリンゴがおいしいのです。その理由は、日照時間が長いのです。早くに花が開花して、

遅く時期に収穫できるので、当然実も大きくなるし、味も良くなるのです。喬木村だけでなく、飯田下伊那地域はリンゴの産地、果物の産地です。

また、孟宗竹はこの地域が北限で、伊那へ行くことはありません。この地方を掘り起こしてみると、先ほどのウコギのほか、誇れるものがいっぱいあります。いちご狩り、リンゴ狩りのほか、市田柿などの果樹、園芸などがあり、また古くから伝わる阿島傘の伝統技術をいまだに継続しているのですが、これは産業としてちょっと成り立たなくなっていて観光資源として少し売れている程度です。

以上のように、私どもも工夫次第ではいろいろできるのではないかと取り組んでいるわけですが、三遠南信自動車道が開通してもリニア中央新幹線の駅に直結する道がありません。ぜひ皆さんに協力していただき、三遠南信自動車道のアクセス道路とリニア中央新幹線の長野県駅とを最短距離で結べば、三河地方の皆さんが長野県内へ行ける観光の一つの戦略的なコースになるのではないかと思います。ぜひ、この地方でお祭りとお祭りの一つ一つの戦略的なコースをつくっていただければ誘客ができるのではないかと考えております。

コーディネーター

天龍村柚餅子生産者組合、組合長の関様お願いいたします。

天龍村柚餅子生産者組合 関組合長

先程から皆様のお話をお聞きしていて、豊かな自然、先人が残してくれた歴史や祭り、素晴らしい宝物のある三遠南信地域に誇りを持って活動されている事、天龍村長も私たちと同じ思いのお話をしてくださり、本当にありがたいことだと思いました。

先ほど天龍村長のお話の中にありましたが、長野県と南信州広域連合が「南信州民俗芸能継承推進協議会」を立ち上げて、私も微

力ながら一員としてお世話になっています。

人口は少なくなる一方で、後継者不足の解決方法を考えるなかで、小学生、中学生、高校生の育成についての取組みや企業や一般の人からの理解と御協力を得るためにセミナーやシンポジウムを各地で行っています。

祭りだけでなく、年中あるその他の行事も大切に伝えていくことも私たちの役目と思います。

また、私共「三遠南信住民ネットワーク協議会」では「三遠南信ここが楽しい事典シリーズ」という本をテキストに、遠州、東三河、南信州を巡り、楽しく交流を重ね、各地を知ることにより益々良いところの発見があります。

現在、「南信州交流の輪」として、今まで全く取り上げられなかった「祭りにちなんだ食文化」も同時に伝承していく必要があると考えました。長野県や南信州広域連合の力をお借りして、祭りの実演やスクリーンでの学習、解説の後に、そのお祭りの御膳、お弁当をお上がりいただくイベントを重ねてまいりました。国道151号沿いの新野から生まれた「祭り街道」というネーミングを使わせていただき、新野の雪まつりの「初春」御膳と弁当、天龍村坂部の冬祭りの「神楽舞」御膳と弁当をそれぞれ作り、ありがたいことに浜松や豊橋からも思いがけなく大勢お越しくださりました。

また、夏の流行病を封じる祇園祭や盆の先祖供養の祭り、秋の五穀豊穰に感謝する祭りについても、これから行うところがございます。

ふるさとの祭りを思い出して御協力を頂くよう東京の銀座や長野にも行き、南信州地域出身の方や関係の方々においでいただき、見て聞いてお上がりいただき大変好評でした。

10年後、この伊那谷にリニア中央新幹線も通るようになれば、大都会だけでなく、世界への窓口にもなれると思います。語学の勉強、外国語のパンフレットも必要になり、若い人

の力を頼らないとできないのです。

そこで、地域おこし協力隊の皆さんにお願いすることを考えました。そのためには、伝えるべきことはきちんと伝え、私たちには見えないものが見られる新しい感覚の持ち主たち、しっかり定住できる環境づくりを三遠南信地域で一体となって組織作りができる事を心から願っているものです。

コーディネーター

それぞれの皆様から、各地域に点在する資源を、連携あるいは交流を通して点から面へつなげることで価値を高めていくことが大切であると改めて認識されたかと思えます。

連携と一口で言いますが、文部科学省の観光ルート、あるいは情報発信、人材育成といった部分もありますし、例えばお祭りと食文化など地域内にある別のものを総合的に活用していくといったこともあるということが認識することができたと思えます。

一方で、後継者不足、担い手不足が大きな課題として認識されています。それから、お祭り、あるいは伝統文化と言いますが、これからは産業化の視点が必要だろうということが改めて気づかせていただいたかと思えます。

それでは、これまでの御発言を踏まえつつ三つ目の論点ですが、取り組むべき課題ということで、地域資源を結びつけて一体的な振興を目指す上で今後取り組むべき課題について、お聞かせいただきたいと思えます。

まず、合唱劇「カネット」をうたう合唱団、清水普及委員長、よろしくお願いたします。

合唱劇「カネット」をうたう合唱団 清水普及委員長

川村カ子トさんは JR 飯田線の歴史には欠かせない人物ですが、私たちは、川村カ子トさんの半生を合唱劇にした合唱劇「カネット」を各地で公演しています。この前の飯田市で

のサミットの交流会で少しお披露目をさせていただいたこともあります。

関さんも含めて、われわれ三遠南信住民ネットワーク協議会の会員は、いろいろなところで三遠南信の交流を行っています。本日前中の住民セッションでもこういった話をしている実働部隊です。

小さなことかもしれないのですが、市町村にはいろいろな人がおり、人が動けば交流が生まれるのだと思います。そこに日の目を当てていくことが大事ではないかと思っております。合唱劇の公演は、豊橋市では3回開催したほか、名古屋や新城市、飯田市でも開催しており、飯田市にもカネト合唱団ができています。合唱劇の主人公である「川村カ子ト氏」の故郷である旭川でも行っています。そのときには、こちらから100人ほどの合唱団を組んで北海道へ行き、旭川の合唱団と共に歌い、観客席も満席になりました。去年は水窪でも行っています。

この合唱劇は、私たちが出向いて公演するのではなくて、その地域の人たちと一緒に歌うのです。そうすることによって、その人たちが「ああ、そうだったのだ」と言って納得していくのです。だから、やはり地域の人たち同士で空間と時間を共有するということが大事であり、それが感動を生むと思うのです。つまり、人々の感動というのは、人と人との交流によって生まれて、それが次の熱源、動力源になると私は思っています。

取り組むべき課題ということですが、山間地では本当に担い手不足だと言われていて、三遠南信地域の貴重なものを継いでいくことが必要なのにできなくなりつつあります。私も三遠南信と関わって30年ほどになりますが、年下の人たちにこのJR飯田線の歴史、地域の隠れた歴史をどうやってつないでいこうかと考えています。今後、若い人たちに三遠南信地域に生きた人々の息吹を伝えていくことの大事さを、私は課題としていただきたいと思います。

っています。

また、三遠南信住民ネットワーク協議会では、三遠南信祭り街道いざないマップというもの、つくっています。ぜひ、その動力源ともいうべき住民の人たちを盛り立てていただきたいと思っています。

コーディネーター

続きまして、蒲郡商工会議所小池会頭、お願いいたします。

蒲郡商工会議所 小池会頭

今、いろいろな町が一生懸命やっているとお聞きもしましたし、蒲郡も年間600万人ぐらい日帰り客が来て、60万人ぐらい泊まっているわけです。あとちょっとすると80万人ぐらいに増えると思います。

それぞれの町がそれぞれやっているのは大切なのですが、三遠南信エリアでやる意味は何かということなのです。半日観光なのか、一日観光なのか、一泊観光なのか、二泊三日なのか。やはりこの三遠南信エリアで取り組むということは、それぞれの町が半日観光をやるよりも遠くから人を呼べる何かをつくっていかないといけないと思うのです。

例えばモン・サン・ミシェルへ行ったって、モン・サン・ミシエルの県が何県なんて知りません。遠くの人、特に海外からやってくる人にとってみると、愛知県だろうが、長野県だろうが、知らない人が多いと思うのです。

そうすると、三遠南信のブランドはどういうイメージのところなのかといったブランディングをしっかりとやって、そのブランディングで引きつけながら個々の町のことを調べていくという形にしないと、小さな町、個々の町のことをいっても、それは点なのです。

そういう意味では、僕はこの三遠南信という地域の風土とブランディングをつくり、そして、そのイメージをつくっていくことを真剣にやらないと、いつまでたっても個々の発

信力だけでは三遠南信というイメージができません。

旅行する人にとってみると、旅行先に来るまでが楽しいわけです。調べて、「あそこへ行こう」、「ここ行こう」、「ここにはこんなものがあるかな」ということがちゃんと調べられる情報発信と、時間ができたときにそこに行きたいなと思ってもらえる情報発信をどういうふうに、誰がやっていくかということをしつかり検討しないと、三遠南信という大きな地域で観光なり地域の情報発信をしていくことは難しいだろうと思っています。

そういった意味では、この地域は外からどう見えるか、この町、この地域にはどういう特徴があるのかという差別化をちゃんと打ち出せる組織が大切だと思います。たとえば東三河では、DMOをつくりながら観光、JR飯田線プロジェクトなど、東三河のエリアブランディングを行い、その東三河と遠州と南信州の3地域が一緒になったらどんなブランディングになるのかということをやっていくことが大切だと思います。

コーディネーター

それでは、豊橋市佐原市長、よろしく願いいたします。

豊橋市 佐原市長

ブランディングの話は、蒲郡商工会議所の小池会頭からお話いただいたので、私は、日本遺産の話をちょっと振り返ろうと思います。

さきほどのブランディングの話もそうなのですが、それぞれの個々のもの、お祭りであったり、伝統芸能であったり、いろいろなものがあるのですが、それぞれの理解していただける人、知っていただける人たちを増やさなければいけないということが一つあると思うのです。さらに、それは継承していただく仲間を増やすことにもきつとつながると思うのです。

今まで南信州の話ばかり出ていたので、東三河の中でなかなかおもしろいなと思っているものを紹介させていただきます。

花祭が東栄町中心に豊根村、設楽町でやっていて、一部、私たち豊橋市にも、主に豊根村から戦後開拓で出てこられた方たちがお宮さんでやっていたりするのですが、不思議なことに東京の東久留米市でやっているところがあるのです。なぜかは知らないけれど、その地域には花祭を知っている人たちがたくさんいて、そこで毎年やっていただいているのです。その人たちは、東栄町の花祭に参加し、いろいろなところでやるときに応援団で駆けつけてくれることがあります。私たちは、外で行動を起こせば、反応はちゃんとあるのだなということ、そこで学ぶことになりました。

そして、もう1点は先ほども下條村長からお話がありました、南信州では下條村と大鹿村、そして、遠州では浦川と湖西、東三河では設楽の田峯と私たちのところ豊橋で三遠南信ふるさと歌舞伎という名前で、朝から晩までずっと素人歌舞伎を見るというのをやっていたのですが、いろいろな人たち、外から来られた方たちを見ると、「これだけレベルの高い地歌舞伎がある地域はない。」と皆様が驚くのです。それでは、これもいっそのこと東京などに打って出たらと思っています。

いろいろなところで知ってもらって、仲間を増やして、わざわざ今は出かけてきて継承してくれるという人たちが、絶対にいます。東栄町には実家も何もなく、盆、正月には帰れないけれど、花祭には参加するという人がいて祭りが成立する。地元に戻って、地元の文化を継承しながら自分の先祖に対する尊敬の念を抱くということをやっています。ぜひほかの民俗芸能もルーツをたどり、いろいろなやり方をすれば仲間をふやせるし、全国に散っている自分たちのDNAを持った人たちがまた仲間になってくれるということができ

るので、ぜひ、そういうことをやってもらえたらと思います。そうすることによって日本遺産にするときも応援団がきつとどこかに隠れていて、文化庁にそんな人がいたりするなんていうことになるかもしれません。

最後に一つ、今度は全然違う観光の切り口なのですが、ちょうどプレミアムフライデーが始まります。月末の金曜日で出発すれば2泊しても、日曜日に帰れるので、ぜひおもしろい企画をしてみたいと、そのためにちょっといいヒントをいただいたと思いました。

コーディネーター

最後のセクションは、取り組むべき課題というテーマでしたが、三遠南信地域全体のブランディング力を高めていくことが必要ではないかと思います。非常に難しい問題ではあると思いますが、合唱劇「カネット」をうたう合唱団普及委員長の清水さんがおっしゃいましたけれど、交流によって感動が生まれるというお話はその一つの答えになるのではないかと感じました。

今回、三つの論点に関しまして皆様からそれぞれのお立場で御意見をいただきました。

結びとしまして、本日のこの「風土」分科会の議論の総括をする必要がございます。これにつきまして、次の3点によりまとめさせていただきますので、発表をさせていただきますと思います。

1点目は、地域連携を生かした広域観光の取り組みの促進です。

三遠南信地域を舞台とする「おんな城主直虎」が既に放映が始まり、好評を博していると思います。三遠南信地域にとっても全体に大きな経済効果をもたらされるということが大いに期待されるわけですが、その効果を一過性のものとするのではなく、長期的な視点を持って交流人口のより一層の拡大を図るためにも、これまでに増して地域連携を生かした広域観光に取り組む重要性が高まっている

ものと考えます。

2点目が、地域資源の維持、承継のための幅広い人材育成が必要であるということです。

地域が有する多様な地域資源を生かすためには、JR飯田線の活用など各地域に点在する地域性を結びつけ、いわゆる点から面への取り組みを推進するとともに、その維持、承継を確保するため、担い手、あるいは推進者、後継者の方、そういった幅広い世代の人材育成に取り組む必要があるだろうということです。

それから3点目、地域ブランド、情報発信力、連携力の強化ということです。三遠南信地域の歴史や風土、文化等、いわゆる地域の宝をまとめながら、訴求力のあるストーリーとしてPRするため、日本遺産への登録実現に向けた取り組みがなされているわけですが、地域全体が一体となってブランド力の強化、あるいは情報発信力を高めるとともに、特にSENAの枠組みを中心としまして、地域内にある具体的な取り組み、実際に取り組んでいることについて、行政と地域、民間が一体となって、一層の連携強化、情報発信、支援協力体制を強化していくことが必要であると考えます。

皆様の御協力によりまして、内容の濃い意見交換を行うことができました。御礼を申し上げます。

